

白いフクロウ

光野 朝風

白いフクロウ

とある村に少年がおりました。

少年は親も知らず、育ての親もおらず、村の人は「あいつは狼に育てられた」とか「親さえも見離すような子だ」とか、さんざんうわさに晒されていました。

少年は森の中で狩りをしたり、木の実を取ったりして暮らしていましたから、村の人とはあまり関わることはありませんでした。

それでも、時折獲った獣の肉や木の実などを村の商店に売りに出ることがあり、そこで無愛想に人とやり取りをするだけでした。

ある日、商店の帰り道、ある老婦人に手を取られ「これはお前さんが採ってきてくれた果実で作ったジャムだよ。おいしくできたから、お前さんも食べておくれ」とジャムの瓶を渡されました。

。

少年は簡単なお礼を言いましたが、うまく伝えられていない気持ちだけが残りました。

老婦人はどこか寂しそうだったので、その日だけは老婦人の傍にいてあげようと少年は思いました。

老婦人が教会へと足を運んだ時、熱心にお祈りしている夫婦を見かけました。

少年はお腹がすいていて、ジャムを食べると甘酸っぱく苦い味が口の中に広がりました。

すると夫婦の姿が急に気になりだしたのです。

盗み聞きするつもりはありませんでしたが、子供を授けられるように一心に願っているようでした。

少年は森に帰っても夫婦の姿が頭から離れませんでした。

輝くステンドグラスの日に当たった2人の姿は、少年にとってとても神聖なもののように見えたのです。

少年はふと考えました。僕の親はどんな姿をしていたのだろう。彼らのように熱心に祈ったり、清らかさを感じさせるような人であったのか。

しかしそれは無駄な考えでした。

夜も眠れず森を歩く少年の前に、カッと2つの光る目が少年の目を覗きこみます。

「だ、誰だい！」

少年が叫ぶと、大きく見えた目はやがて月の光を浴びて、白き姿をあらわにさせます。

「わしはこの森に長く住んでいるフクロウじゃ。わしは何でも知っている。お前、今悩んでいることがあるのだろう」

フクロウに突然問われても少年は悩みを上手く言葉にすることができませんでした。

「親とは何か、悩んでおるのじゃろう？」

ふさがちな目を驚いたように見開いてフクロウを見つめます。

「僕、子供ってやつを夫婦にあげたいんです」

「ほう。それはなぜじゃ」

「わからないけど、あんなに真剣に祈って純粋に希望を抱いている人を僕は美しいと思ったん

です」

ホウホウとフクロウは笑い、3度瞬きしてから「お前には人の願いを背負う覚悟はあるか。魂も肉も背負い続けるだけで終わるがな」と目を細めます。

「あります。僕は何でもします」

「それなら」

とフクロウが語った子供を夫婦に授ける方法がありました。

それはフクロウの皮を剥ぎ、肉を喰らい、皮と羽をまとい、夫婦の家へと飛んでいき、願いを一声夜空に向けて叫ぶこと。

そして願いを叶えた時、少年の肉をフクロウへ捧げること。

「捧げた後はどうなるんですか」

少年が尋ねると、最も森に近い存在になるだけだと言われました。

全てを受け取った少年はフクロウを喰らい、夫婦の家へと光り輝きながら飛んでいきました。

家の壁をすりりとすり抜け、夫婦が寝ているベッドの上に飾ってあった神の偶像に大きな羽をたたみ、願い事を一声「ホウ」と叫びました。

するとなお少年の体は光を放ち、どんどん周りに溶け込んでいきました。

夫婦はしばらくして子供を授かりました。

少年がいなくなり、老婦人のジャムの味は少しだけ変わりました。少しだけ変わったことを老婦人だけが知っておりましたが、夫婦は老婦人からもらうジャムの味を、いつもおいしいと思っていました。

「おばあちゃん。孫もね、おいしいって言っているよ」

「それはよかったね。また作るからね」

夜になると虫の音や獣の鳴き声が森から響きます。

時折、フクロウが「ホウ」と鳴いていますが、村の人はフクロウに気も留めずに朝を迎えます。

ましてや少年のことなど、誰も思い出しません。

ただ、ある夜光るフクロウを見て子供を授かった夫婦だけはフクロウに感謝をしてお祈りに出かけているとのことでした。